

教員養成課程在籍学生の子ども観に関する一考察

吉澤千夏*・大瀧ミドリ**

(平成22年9月30日受付；平成22年11月5日受理)

要 旨

本報告は、教員養成課程在籍学生の子ども観を捉えるために、子どもに対する現在及び過去の感情（「好き／嫌い／わからない」）、子どもを「好き／嫌い／わからない」と回答する理由について、テキストマイニングの手法により分析を行い、以下の結果を得た。

(1) 学生の多くは、子どもを「好き」だと回答している。また、子どもに好意を持つ者は子どもを「正直」「素直」「かわいい」と回答し、子どもに嫌悪感を持つ者は子どもを「面倒」、対処に「戸惑った」り、「どう接したらよいかわからない」と回答する者が多い。

(2) 幼い頃、子どもを「好き」だったと回答する学生が半数を占める一方で、幼い頃は子どもが「嫌い」「わからない」とする者を合わせて4割を超えている。子どもに対する「好き」「嫌い」は、必ずしも幼い頃から持続するものではないことが示された。

(3) 子どもを肯定的に受け止めるためには、子どもと関わる経験に加えて、十分な子ども理解が必要であることが示唆された。

KEY WORDS

view on children 子ども観, teacher training university 教員養成課程, university students 大学生, text mining テキストマイニング

1 緒 言

教員養成課程に在籍する学生の多くは、教師になることを目指し、学んでいる。教師として現場に立つためには、資格が不可欠であり、その取得には教育実習が重要な学びの場として位置づけられている。教育実習は学生にとって、子どもたちと実際に関わる機会として期待を高める一方で、子どもたちとの関わりに不安を感じる学生も少なくない。さらに、実習中に様々な出来事に遭遇し、自信を失ったり、教師になることを再考する者もいる。その原因の一つとして、学生が抱えている子どもに対する認識と現実の子どもの姿のギャップが挙げられる。現行の中学校学習指導要領⁽¹⁾では、中学校家庭科の学習において保育所・幼稚園等での幼児との触れ合いを求めている。そのため最近の学生の多くは、学校教育の中で幼い子どもと関わる体験をし、大学に入学してくる。しかし、日常的に子どもと関わる経験は少ないと考えられ、教育実習のように長期的で、しかも多様な子どもたちと関わることは、学生にとって大きなプレッシャーになると推察される。そこで教員養成課程に在籍する学生が子どもをどのように捉えているかを明らかにすることにより、現実の子どもの姿との相違を知り、教育実習に不安を感じている学生に対応するために有益な知見が得られると考えられる。

学生の子ども観に関する研究は、保育士・幼稚園教諭養成課程の学生や看護系学生を対象としたものを中心に多数行われている⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾。その研究の多くは、調査紙を用いて、あらかじめ設定された設問に対する回答を基に、得られた数量的データを因子分析等により検討する等の方法がとられている⁽⁶⁾⁽⁷⁾。これに対して、自由に記述された回答を分析するのがテキストマイニングである。この手法は、テキストから有益な情報を抽出し、一連の自由記述式回答に含まれる本質的な情報を少数のカテゴリーで表現することを可能にする。さらに、この分析を通して得られたカテゴリーを用いて、他の数量的なデータとともに統計分析を行うことにより、被験者の思考等に対する理解を深めることができる⁽⁸⁾。

そこで本研究は、テキストマイニングの手法を用いて、本学学生の子ども観を捉えることを目的とする。本研究における子ども観とは、子どもをどのように捉え、認知しているかという視点を意味する。本報告では特に、子どもに対する現在及び過去の感情（「好き／嫌い／わからない」）について明らかにするとともに、子どもを「好き／嫌い／

わからない」と回答する理由について、テキストマイニングによりカテゴリー化し、検討することを目的とする。

2 方法

2.1 研究対象

研究対象は、本学において前期に開講されている「家庭」を受講している学生282名である。本報告においては、教員養成課程を希望して入学してきた学生の子ども観を捉えることを目的として、現時点において「子ども」に関する専門的知識・経験が少ないと考えられる学部1年生174名を対象として分析を行う。

2.2 調査方法

調査は、自由記述式の調査紙を用いて行う。調査紙の内容は以下のとおりである。

- ・私は子どもが（「好き／嫌い／わからない」等を自由に記述）です*
- ・その理由は？（自由記述）*
- ・私は子どもの頃、子どもが（「好き／嫌い／わからない」等を自由に記述）でした*
- ・その理由は？（自由記述）*
- ・今と子どもの頃で、変化はみられたか？
- ・なぜ変化したのか？なぜ変化しなかったのか？（自由記述）
- ・私は将来、子どもが（「欲しい／欲しくない／わからない」等を自由に記述）です
- ・その理由は？（自由記述）
- ・私は子どもの頃、子どもがいる生活を想像して（「いた／いなかった／わからない」等を自由に記述）
- ・今と子どもの頃で、変化はみられたか？
- ・なぜ変化したのか？なぜ変化しなかったのか？（自由記述）
- ・これからの「私」は子どもとどのように関わっていきたいか？（自由記述）

本報告では、上記の調査内容のうち、*で示された質問項目（4項目）について分析を行う。

2.3 分析方法

分析にはテキストマイニングの手法を用いる。本報告においては、PSAW Text Analytics for Surveysにより、自由記述によって得られた回答をカテゴリー化した後、分析を行う。カテゴリーを構成するキーワードの抽出にあたっては、感性和みなされる表現（主に述部）を抽出し、その感性の指す主題を出力する感性分析[®]を行う。これにより、自由記述された回答に含まれるキーワードについて、感性タイプを「肯定的（良い）タイプ」「否定的（悪い）タイプ」「その他」に大別し、さらに「良いー楽しい」「悪いー嫌い」のように、細かいタイプに分類することが可能となる。その後、5人以上から記述がみられるキーワード及びタイプをカテゴリーとして採用する。さらにキーワードの内包関係（カテゴリー「子ども」にキーワード「子ども中心」を含む等）をもとにグループ化し、共起規則（「元気」と「もらう」がともに記述されている等）を作成する言語学的手法に基づき、カテゴリーを再構成する。得られたカテゴリーは、単独では解釈が困難なカテゴリー（「ある」「いる」「なる」等）の削除、出現傾向が類似するカテゴリーの統合、新たなカテゴリーの抽出等の検討を反復して行い、決定する。

3 結果及び考察

「家庭」を受講している学部1年生174名中、165名の回答があった。回収率は94.8%である。以下、165名を対象として分析を行う。

3.1 『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』とその理由

対象者165名のうち、私は子どもが「好き（大好き等を含む）」と回答した者（以後、「好感」群）は140名（84.8%）、「嫌い（苦手等を含む）」と回答した者（以後、「嫌悪」群）は5名（3.0%）、「わからない」と回答した者は19名（11.5%）、無記入が1名（0.6%）である。このことから、学部1年生の多くが子どもを「好き」であることが明らかになる。

次に、子どもに対して「好き／嫌い／わからない」と回答した理由についての自由記述をPSAW Text Analytics for Surveysにより分類した結果、20カテゴリーが抽出された（表1）。抽出されたカテゴリーへの回答の有無と「好感」群・「嫌悪」群についてクロス集計を行い、直接確率法による検定を行った結果、6カテゴリーの偏りについて、有意または有意な傾向が認められる（図1）。これらのうち、肯定的タイプである「良いー良い」（両側検定： $p=.014$ ）、「良いー褒め・賞賛」（両側検定： $p=.017$ ）の2カテゴリーについては「嫌悪」群よりも「好感」群の方が、否定的タイプである「悪いー悪い」（両側検定： $p=.031$ ）、「悪いー不満」（両側検定： $p=.009$ ）、「悪いー嫌い」（両側検定： $p=.006$ ）、「悪いー困っている」（両側検定： $p=.068$ ）の4カテゴリーについては「好感」群よりも「嫌悪」群の方が有意に回答が多くみられる。このことから、子どもが「嫌い」と回答した者と比して、「好き」と回答している者は子どもを「正直」「素直」で、「かわいい」と感じており、子どもが「好き」と回答した者と比して、子どもが「嫌い」と回答している者は子どもを「嫌い」で「面倒」な存在であり、対処に「戸惑った」り、「どう接したらよいかわからない」と感じている者が多いといえる。そもそも子どもは、おとなのような活動性を獲得する発達の途上にあり、円滑なコミュニケーションを構築することが困難な場合も多くみられる。しかし、そのことを「正直」「素直」「かわいい」等のように肯定的に受け止めることができる場合において、子どもに対して好意的な感情を持ちうると考えられる。一方、子どもの未成熟さを「面倒」等と感じたり、関わろうにも「どう関わったらよいか」「戸惑った」りすることで、子どもを「嫌い」だと感じてしまうのではないかと考えられる。実際の記述内容をみると、「好感群」では子どものかわいらしさや素直さに好感を抱いているのに対して、「嫌悪群」では子どもと関わることを面倒だと感じたり、どう接していいのかわからない等の記述がみられる。

好感群 ・かわいくて素直だから。
嫌悪群 ・いいところ（フレンドリーなところとか）があるが、やたら面倒なときもあるから。 ・行動が乱暴。思ったことをストレートにいうから怖い。どう接していいのかわからないから。

このことから、一般に子どもらしいといわれるような子どもの特性をどのように受け止めているかが、子どもに対する感情や子ども観の形成に意味を持つことが示唆される。

3. 2 『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」だった』とその理由

対象者165名のうち、私は子どもの頃、子どもが「好き（大好き等を含む）だった」と回答した者（以後、「過去好感」群）は91名（55.2%）、「嫌い（苦手等を含む）だった」と回答した者（以後、「過去嫌悪」群）は24名（14.5%）、「わからない」と回答した者は49名（29.7%）、無記入が1名（0.6%）である。このことから、幼い頃、子どもを「好き」だったと感じている学生が半数を占める一方で、幼い頃は子どもが「嫌い」と回答する者、その当時のことを思い出せない等の理由から「わからない」とする者を合わせて4割を超えており、「子どもが好き」という思いは、必ずしも幼い頃から持続してきたわけではないことがうかがえる。

次に、子どもに対して「好き／嫌い／わからない」と回答した理由についての自由記述をPSAW Text Analytics for Surveysにより分類した結果、21カテゴリーが抽出された（表2）。抽出されたカテゴリーへの回答の有無と子どもの「過去好感」群・「過去嫌悪」群についてクロス集計を行い、直接確率法による検定を行った結果、10カテゴリーの偏りについて、有意または有意な傾向が認められる（図2）。これらのうち、肯定的タイプである「良いー楽しい」（両側検定： $p=.000$ ）、「良いー好き」（両側検定： $p=.035$ ）、「良いー褒め・賞賛」（両側検定： $p=.096$ ）並びに「年下」（両側検定： $p=.020$ ）、「世話・面倒」（両側検定： $p=.002$ ）の5カテゴリーについては「過去嫌悪」群よりも「過去好感」群の方が、否定的タイプである「悪いー悪い」（両側検定： $p=.007$ ）、「悪いー嫌い」（両側検定： $p=.061$ ）、「悪いー不満」（両側検定： $p=.007$ ）、「悪いー批判」（両側検定： $p=.000$ ）、「悪いー不快」（両側検定： $p=.000$ ）の5カテゴリーについては「過去好感」群よりも「過去嫌悪」群の方が有意に回答が多くみられる。このことから、幼い頃、子どもを「嫌い」だったと回答した者と比して、「好き」だったと回答している者は「年下」の子どもの「世話・面倒」をみるのが「楽しい」「好き」で、子どもを「かわいい」と感じていたことが示された。一方、子どもが「好き」だったと回答した者と比して、子どもが「嫌い」だったと回答している者は子どもを「手間がかかる」「面倒」「生意気」「うっとうしい」存在であり、子どもを「嫌」だと感じていたことが示された。実際の記述内容をみると、「過去好感群」では子どもをかわいいと思うとともに、子どもの世話をするを「好き」「楽しい」と受け止めている。一方、「過去嫌悪群」では子どもとの関わりを「手間がかかる」「面倒」なことと感じていることがわかる。

表1 子どもが「好き／嫌い／わからない」理由

抽出されたカテゴリ(n)	例	
肯定的タイプ	良いー良い (86)	正直で純粋だから。無邪気で素直であるから。
	良いー褒め・賞賛 (87)	かわいいから。
	良いー楽しい (25)	話していて楽しいから。
	良いー快い (23)	かわいいし、癒される。とてもかわいく、触れ合っていると和むから。
	良いー好き (19)	素直なところが好きです。
	良いー嬉しい (7)	頼られるとうれしいから。
	良いー幸福 (4)	無垢で純粋な、かわいい子どもをみているだけで、幸せになってくるから。
否定的タイプ	悪いー悪い (16)	子どもと接する方法がわからなくなってきた。小さすぎるとどう接していいのかわからないから。
	悪いー不満 (10)	かわいいし、一緒にいてすごく楽しいけど、たまにすごく面倒くさくなる。
	悪いー嫌い (8)	好きな子もいれば嫌いな子もいます。
	悪いー困っている (4)	対処できる子ならいいけれど、出来ない時にとまどいそう。
その他	その他ー驚き (10)	発想力がすごい。
キーワード	言動・発想 (15)	子どもならではの、不可解というかファンタスティックな行動がみていて面白いからです。好奇心や発想がとてもかわいいと思うから。
	関わる・触れ合う・接する (15)	関わる中で自分が気づかされるのがたくさんある。とてもかわいく、触れ合っていると和むから。接していて楽しい。
	一緒 (13)	一緒にいると自分も笑顔になれるから。
	元気 (10)	元気で無邪気なところがかわいいから。
	多い (7)	子どもたちは純粋で、子どもたちと触れ合っていると多くのことを学ぶことが出来るから。
	心 (5)	みていて心が和むから。
	感じる (4)	魅力を感じる。
	成長 (3)	成長が目に見えて、そこがいい。

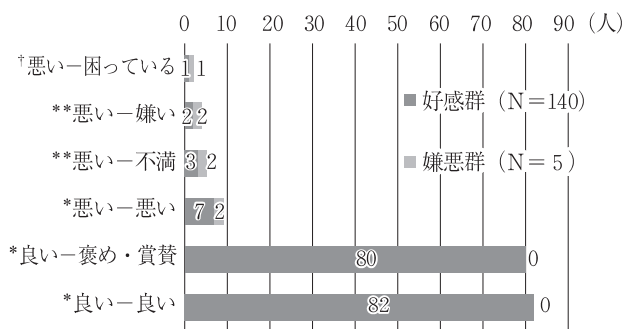


図1 「私は子どもが好き／嫌いです」とその理由 (有意なもののみ: †p<.10, *p<.05, **p<.01)

表2 子どもが「好きだった／嫌いだった／わからない」理由

抽出されたカテゴリ(n)	例	
肯定的タイプ	良いー楽しい (65)	保育園の頃、下のクラスによく遊びに行っていて楽しんでいた。
	良いー好き (35)	自分より小さい子と遊ぶのが好き。
	良いー褒め・賞賛 (27)	かわいいし、面白いから。
	良いー嬉しい (9)	末っ子だから、面倒をみてあげるのがうれしかった。
	良いー良い (7)	子どもたちみんなと仲良くしたいという気持ちが強くあったからです。
	否定的タイプ	悪いー悪い (10)
悪いー嫌い (10)		生意気で嫌だった。
悪いー不満 (5)		かわいいと思わなかったし、面倒くさいと思っていた。
悪いー批判 (5)		生意気だから。
悪いー不快 (5)		うっとうしかったから。
悪いー悲しみ全般 (1)		何か問題を起こすと怒られるから。
年下 (65)		年下を相手に遊ぶのは楽しいから。
キーワード	世話・面倒 (28)	世話を焼くのが好きだったから。自分より小さい子の面倒をみるのが好きだった。
	きょうだい・いとこ (27)	弟がいて、好きだから。
	年上 (16)	年上は何となく苦手だった。
	考える・意識する (15)	考えたことがない。意識したことがないから。
	記憶・覚えていない (15)	記憶にないから。覚えていない。
	組織名 (8)	小学校の頃、幼稚園の子と遊ぶのが好きだったから。
	関わる・接する (6)	小6のとき、班行動で下の学年の子と関わるのが好きだった。小さい子と接していると、すごく慕われていることがわかって嬉しかった。
	なつく・慕う (6)	なついてくれたから。慕われるのがよい気分だったから。
	近所 (4)	近所の小さい子と遊ぶのが楽しかったから。

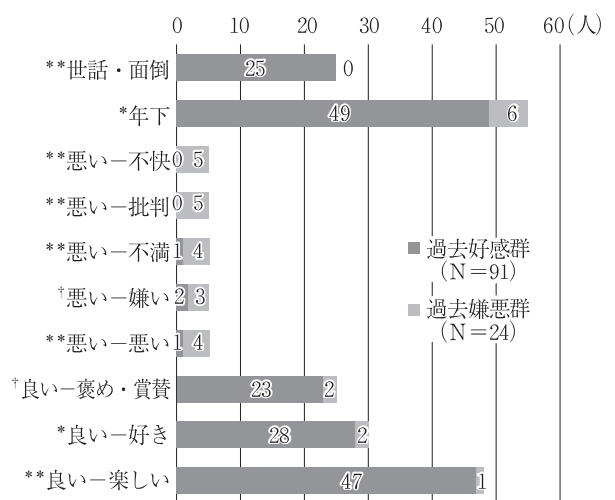


図2 「私は子どもの頃、子どもが好き／嫌いでした」とその理由 (有意なもののみ: †p<.10, *p<.05, **p<.01)

過去好感群
<ul style="list-style-type: none"> ・自分よりも年下の子どもがかわいいと思い、一緒に遊ぶことや、世話をすることがすごく好きだから。 ・年下の子どもの面倒をみていたとき楽しかったし、やりがいがあったから。
過去嫌悪群
<ul style="list-style-type: none"> ・わがままだから。手間がかかるから。関わり方がわからないから。 ・関わっているのが面倒くさかった。

このことから、自分が幼い頃に子どもを好きだったか否かは、自分よりも年下の子どもと関わる際の子どもの受け止め方に起因することが示唆される。

3. 3 現在と過去（子どもの頃）の子どもに対する「好き／嫌い／わからない」およびその理由の関連

まず、現在と過去の子どもに対する「好き／嫌い」に関連があるかを捉えるために、3.1で分類した「好感」群・「嫌悪」群と3.2で分類した「過去好感」群・「過去嫌悪」群について相関分析を行った結果、有意ではなかった ($r=.072, p=.474$)。このことから、現在と過去の子どもに対する「好き」「嫌い」には関連が認められないことが明らかになる。3.1及び3.2の結果から、現在において子どもを「好き」である者は8割を超えるものの、幼い頃に子どもが「好き」だったと回答する者は5割程度である。また、現在において子どもを「嫌い」である者は3.0%と極めて少ないものの、幼い頃に子どもが「嫌い」だったと回答する者は14.5%である。上記のように、子どもに対する「好き」「嫌い」の変化には相関がみられないものの、その変化には何らかの要因があると考えられる。そこで、子どもに対する「好き／嫌い／わからない」の理由について、さらに分析を行う。

3. 3. 1 現在の子どもに対する「好き／嫌い／わからない」の理由の関連

現在および過去における子どもへの「好き／嫌い／わからない」に対する理由について、関連の有無を捉えるために相関分析を行う。その結果、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由に関して有意な相関が認められるのは22組である（表3）。このうち18組においては正の相関、4組においては負の相関が認められる。

正の相関がみられる18組のうち、肯定的タイプ間で有意な相関が認められるのは「良い－良い」と「良い－褒め・賞賛」、「良い－楽しい」と「良い－幸福」の2組、否定的タイプ間で有意な相関が認められるのは「悪い－悪い」と「悪い－嫌い」、「悪い－悪い」と「悪い－困っている」、「悪い－嫌い」と「悪い－困っている」の3組、肯定的タイプと否定的タイプ間で有意な相関が認められるのは「良い－好き」と「悪い－嫌い」の1組、感性タイプとキーワード間で有意な相関が認められるのは12組である。感性タイプとキーワード間で相関が認められる12組のうち、肯定的タイプとキーワード間で有意な相関が認められるのは「良い－楽しい」と「言動・発想」、「良い－楽しい」と「関わる・触れ合う・接する」、「良い－楽しい」と「一緒」、「良い－楽しい」と「感じる」、「良い－快い」と「心」、「良い－嬉しい」と「元気」、「良い－嬉しい」と「感じる」、「良い－幸福」と「関わる・触れ合う・接する」、「良い－幸福」と「成長」の9組、否定的タイプとキーワードでは「悪い－悪い」と「関わる・触れ合う・接する」、「悪い－不満」と「一緒」の2組、その他とキーワード間では「その他－驚き」と「一緒」の1組である。キーワード間では有意な相関は認められない。

一方、負の相関がみられる4組のうち、肯定的タイプ間で有意な相関が認められるのは「良い－褒め・賞賛」と「良い－楽しい」の1組、肯定的タイプと否定的タイプ間で有意な相関が認められるのは「良い－良い」「悪い－困っている」の1組、感性タイプとキーワード間で有意な相関が認められるのはいずれも肯定的タイプとキーワード間で、「良い－褒め・賞賛」と「多い」、「良い－褒め・賞賛」と「心」の2組であり、否定的タイプ間で有意な相関が認められるものはない。また、キーワード間でも有意な相関は認められない。

上記の結果から、肯定的タイプ同士、否定的タイプ同士の有意な相関が多く認められる。実際の記述内容をみると、「無垢」「純粋」（「良い－良い」）、「かわいい」（「良い－褒め・賞賛」）子どもをみていることが「幸せ」（「良い－幸福」）と感じる学生がいる一方で、騒がれたり泣かれたりすると「どうしたらいいのかわからなくなる」（「悪い－悪い」「悪い－困っている」）ため、子どもを「嫌い」「苦手」（「悪い－嫌い」）と捉えている学生もいることが明らかになる。

<ul style="list-style-type: none"> ・無垢で純粋な、かわいい子どもをみているだけで、幸せになってくるから。

・嫌いというより苦手です。騒がれたり泣かれたりすると、どうしたらいいかわからなくなる。

しかし下記のようなケースもある。

・好きな子もいれば嫌いな子もいます。

これは、肯定的タイプである「好き」（「良い－好き」）と否定的タイプである「嫌い」（「悪い－嫌い」）が記述の中に混在するケースである。このように、学生の中には、「子ども」という存在をひたすら肯定的に受け止める者と、「子ども」との関わりに不安を感じて否定的になる者、個別具体的に子どもをイメージし、状況等に応じて好き嫌いが分かれる者がいることが示される。

また、上記以外に有意な相関が認められるものを詳しくみると、肯定的タイプに対しては、「言動・発想」、「関わる・触れ合う・接する」、「一緒」、「感じる」、「心」、「元気」、「成長」といったキーワードが関連して表出している。

- ・発想や発言が面白いから（改めて気付かされることが多い）。かわいいと感じるから。一緒に過ごすことが楽しいと感じるから。自分より小さな子と過ごす機会が多かったから。
- ・関わっているときはとても楽しい（年齢に関係なく）。素直で正直な反応が見れる（自分に新しい視点を与えてくれるきっかけとなる）。
- ・本当に心の底から自分を表現できる。一緒にいると癒される。
- ・明るく、いつも元気をくれるから。
- ・かわいいから。成長していくのを見るのが楽しいから。

子どもと関わり、触れ合い、接したり、一緒に過ごす経験が、子どもの言動や発想の面白さを感じたり、成長を感じ取ったり、子どもから元気をもらう等、子どもに対して肯定的な感情を持つ要因となることが示唆される。

一方で、否定的タイプにおいても、「関わる・触れ合う・接する」、「一緒」が関連するキーワードとして挙げられる。実際の記述内容を見ると、子どもと関わる経験を持ちながらも、子どもに対する理解が充分でなかったり、子どもを受け入れる土壌が自分の中に充分に育っていない場合、子どもを否定的に受け止める要因になると考えられる。

- ・小さすぎるとどう接していいのかわからないから。
- ・かわいいし、一緒にいてすごく楽しいけど、たまにすごく面倒くさくなる。

これまででも、子どもと関わり、触れ合う経験の重要性は指摘されており、この結果からも経験の重要性が示される。しかし、経験以前に、十分な子ども理解を図り、子どもと関わることについて思考する場を持つことが、子どもを肯定的に受け止めるために必要であると考えられる。

さらに、有意な負の相関がみられる4組をみると、そのうち3組は「良い－褒め・賞賛」と「良い－楽しい」「多い」「心」が関連していることが明らかになる。「良い－褒め・賞賛」には「かわいい」「魅力的」「愛くるしい」等の記述が含まれており、これに対して「良い－楽しい」「多い」「心」は、子どもと関わることで得られる自分自身の楽しみや経験、気持ち等の記述が含まれている。

- ・話していて楽しいから。（「良い－楽しい」）
- ・子どもたちは純粋で、子どもたちと触れ合っていると多くのことを学ぶことが出来るから。（「多い」）
- ・心が和みますから。（「心」）

このことから、子どもを「かわいい」等と表現することと、自分自身が子どもから何らかのものを「得る」という感覚は、互いに正比例しないことが示される。つまり、子どもが「かわいい」から好きであると認識している者は、子どもとの関わりから何かを得たり、それに楽しみを見出すことが少なくなり、子どもとの関わりに楽しさを感じたり、何か得ている感じを持つ者は、子どもを「かわいい」から好きだと思えることが少なくなるといえる。

3. 3. 2 過去（子どもの頃）の子どもに対する「好き／嫌い／わからない」の理由の関連

次に、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由に関して有意な相関が認められるのは19組である（表4）。このうち17組においては正の相関が、2組においては負の相関が認められる。

正の相関がみられる17組のうち、感性タイプ間で有意な相関が認められるのは、否定的タイプ間の「悪い－悪い」と「悪い－悲しみ全般」の1組のみであり、残り16組のうち「良い－楽しい」と「年下」、「良い－好き」と「世話・面倒」、「良い－好き」と「年下」、「良い－好き」と「組織名」、「良い－褒め・賞賛」と「きょうだい・いとこ」、「良い－嬉しい」と「年下」、「良い－嬉しい」と「なつく・慕う」の7組は肯定的タイプとキーワード間、「悪い－悪

表3 『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由

：タイプ及びキーワードの相関分析（有意な相関がみられるもの）

「良いー良い」	「良いー褒め・賞賛」	r=.186, p=.017
「良いー楽しい」	「良いー幸福」	r=.153, p=.049
「良いー楽しい」	「言動・発想」	r=.219, p=.005
「良いー楽しい」	「関わる・触れ合う・接する」	r=.219, p=.005
「良いー楽しい」	「一緒」	r=.316, p=.000
「良いー楽しい」	「感じる」	r=.153, p=.049
「良いー快い」	「心」	r=.235, p=.002
「良いー好き」	「悪いー嫌い」	r=.184, p=.018
「良いー嬉しい」	「元気」	r=.577, p=.000
「良いー嬉しい」	「感じる」	r=.162, p=.037
「良いー幸福」	「関わる・触れ合う・接する」	r=.224, p=.004
「良いー幸福」	「成長」	r=.273, p=.000
「悪いー悪い」	「悪いー嫌い」	r=.212, p=.006
「悪いー悪い」	「悪いー困っている」	r=.215, p=.006
「悪いー悪い」	「関わる・触れ合う・接する」	r=.181, p=.020
「悪いー不満」	「一緒」	r=.397, p=.000
「悪いー嫌い」	「悪いー困っている」	r=.331, p=.000
「その他ー驚き」	「一緒」	r=.303, p=.000
「良いー良い」	「悪いー困っている」	r=-.164, p=.035
「良いー褒め・賞賛」	「良いー楽しい」	r=-.175, p=.024
「良いー褒め・賞賛」	「多い」	r=-.162, p=.038
「良いー褒め・賞賛」	「心」	r=-.187, p=.016

表4 『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由

：タイプ及びキーワードの相関分析（有意な相関がみられるもの）

「良いー楽しい」	「年下」	r=.289, p=.000
「良いー好き」	「世話・面倒」	r=.555, p=.000
「良いー好き」	「年下」	r=.279, p=.000
「良いー好き」	「組織名」	r=.297, p=.000
「良いー褒め・賞賛」	「きょうだい・いとこ」	r=.203, p=.009
「良いー嬉しい」	「年下」	r=.189, p=.015
「良いー嬉しい」	「なつく・慕う」	r=.238, p=.002
「悪いー悪い」	「悪いー悲しみ全般」	r=.307, p=.000
「悪いー悪い」	「記憶・覚えていない」	r=.185, p=.018
「悪いー悪い」	「関わる・接する」	r=.222, p=.004
「悪いー嫌い」	「年上」	r=.260, p=.001
「悪いー悲しみ全般」	「きょうだい・いとこ」	r=.177, p=.023
「年下」	「きょうだい・いとこ」	r=.247, p=.001
「年下」	「世話・面倒」	r=.329, p=.000
「世話・面倒」	「きょうだい・いとこ」	r=.280, p=.000
「世話・面倒」	「組織名」	r=.199, p=.011
「年上」	「関わる・接する」	r=.155, p=.047
「良いー好き」	「良いー褒め・賞賛」	r=-.189, p=.015
「年下」	「考える・意識する」	r=-.212, p=.006

い」と「記憶・覚えていない」、「悪いー悪い」と「関わる・接する」、「悪いー嫌い」と「年上」、「悪いー悲しみ全般」と「きょうだい・いとこ」の4組は否定的タイプとキーワード間、「年下」と「きょうだい・いとこ」、「年下」と「世話・面倒」、「世話・面倒」と「きょうだい・いとこ」、「世話・面倒」と「組織名」、「年上」と「関わる・接する」の5組はキーワード間で有意な相関が認められる。

一方、負の相関がみられる2組のうち感性タイプ間で有意な相関が認められるのは、肯定的タイプ間の「良いー好き」と「良いー褒め・賞賛」の1組のみであり、もう1組はキーワード間の「年下」と「考える・意識する」である。

上記の結果から、感性タイプ間で有意な正の相関が認められるのは、否定的タイプ間の「悪いー悪い」と「悪いー悲しみ全般」のみであり、それ以外は、いずれも感性タイプとキーワード間においてである。肯定的タイプと有意な正の相関が認められるキーワードをみると、「年下」、「世話・面倒」、「組織名」、「きょうだい・いとこ」、「なつく・慕う」である。実際の記述内容を見ると、自分よりも年下の子どもやきょうだいの世話や面倒をみるのが好きであり、その経験を小学校やそれ以前から行っていることにより、幼い頃に子どもを肯定的に受け止める土壌が形成されていたことが示唆される。

- ・低学年の子どもの世話をするのが好きだったから。
- ・なついてくれたから。弟がいて、好きだから。
- ・小学校の頃、低学年の子の面倒をみるのが好きだったから。
- ・6歳と8歳下にいとこがいるのですが、常に遊びたくて、触れたくて大好きでした。また、保育園の頃、下のクラスによく遊びに行っていて楽しんでいました。

一方、否定的タイプと関連するタイプ及びキーワードでは、「悪いー悲しみ全般」、「記憶・覚えていない」、「関わる・接する」、「年上」、「きょうだい・いとこ」が挙げられる。実際の記述内容を見ると、経験上、年上の人との関わりが多く、小さな子どもとの接し方がわからなかったり、関わった記憶がない、思い出せない場合、幼い頃に子どもを肯定的に受け止めることが困難になると考えられる。

- ・末っ子だから、お姉さんの方が好きだった。小さい子とはどう接していいかわからなかった。
- ・姉・兄がいて、いつも年上の人と遊んでいたから。年下の子ともとはあまり遊んだ記憶がない。

キーワード間で有意な相関が認められる組では、「年下」「きょうだい・いとこ」「世話・面倒」といったキーワードが多く挙げられる。

- ・年下のいところがすごくかわいくて、しょっちゅうお世話をしていたから。
- ・弟や妹がいるため、小さな子どもの面倒をみるのが好きだったから。

上記の記述をみると、年下の子ども、特にきょうだい・いとこといった身近な存在の世話や面倒をみるのが、幼い頃の子どもに関わる経験として記憶されており、それを自らの子どもの頃の子どもに対する「好き／嫌い／わからない」の理由と関連付けていると考えられる。

有意な負の相関がみられる2組については、「良い－好き」と「良い－褒め・賞賛」、「年下」と「考える・意識する」である。まず、「良い－好き」と「良い－褒め・賞賛」についてみると、「良い－好き」は子どもの「面倒・世話」「年下」と結びつくカテゴリーであり、「良い－褒め・賞賛」は「かわいい」等の記述が含まれている。このことから、幼い頃、「年下」の子どもの「世話・面倒」をみるのが好きだった者は、子どもを好きな理由として、子どもが「かわいい」からと考えておらず、幼い頃、子どもを「かわいい」と感じていた者は、年少の子どもの「世話・面倒」をみるのが好きだから子どもを好きだと思っていないといえる。この「良い－好き」と「良い－褒め・賞賛」は、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由においては有意な相関がみられなかったことから、幼い頃の子ども特有の子ども観の表れであると考えられる。

次に、「年下」と「考える・意識する」について、実際の記述内容を見ると、「考える・意識する」には、幼い頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」を考えたり、意識したことがないという記述が含まれている。考えたり、意識したりしないが故に、自分よりも幼い子どもを指す「年下」というキーワードが表出されないと考えられる。

- ・考えたこともない。
- ・意識したことがないから。

3. 3. 3 現在と過去（子どもの頃）の子どもに対する「好き／嫌い／わからない」の理由の関連

さらに、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由と『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由の間に関連があるかを捉えるために、相関分析を行う。その結果、有意な関連が認められるのは27組である（表5）。このうち26組においては正の相関が、1組においては負の相関が認められる。

正の相関がみられる26組のうち、感性タイプ間で有意な相関が認められるのは（以下、前者が『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由から抽出されたタイプ・キーワード、後者が『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由から抽出されたタイプ・キーワード）、肯定的タイプ間の「良い－良い」と「良い－嬉しい」、「良い－褒め・賞賛」と「良い－褒め・賞賛」、「良い－幸福」と「良い－楽しい」の3組、否定的タイプ間の「悪い－悪い」と「悪い－嫌い」、「悪い－嫌い」と「悪い－嫌い」の2組、その他と肯定的タイプ間の「その他－驚き」と「良い－良い」の1組であり、残り20組のうち、「良い－嬉しい」と「近所」、「関わる・触れ合う・接する」と「良い－楽しい」、「成長」と「良い－楽しい」、「成長」と「良い－好き」の4組は肯定的タイプとキーワード間、「悪い－不満」と「世話・面倒」、「悪い－嫌い」と「年下」、「悪い－困っている」と「関わる・接する」、「言動・発想」と「悪い－悲しみ全般」の4組は否定的タイプとキーワード間、「その他－驚き」と「年下」、「その他－驚き」と「世話・面倒」、「その他－驚き」と「なつく・慕う」の3組はその他とキーワード間で有意な相関が認められる。さらに「言動・発想」と「世話・面倒」、「一緒」と「世話・面倒」、「元気」と「世話・面倒」、「元気」と「近所」、「心」と「考える・意識する」、「成長」と「年下」、「成長」と「世話・面倒」、「成長」と「きょうだい・いとこ」、「成長」と「組織名」の9組はキーワード間で有意な相関が認められる。

一方、負の相関は、肯定的タイプ間「良い－好き」「良い－褒め・賞賛」で有意な相関が認められるのみである。

上記の結果のうち、まず、肯定的タイプ同士で有意な相関が認められる組をみると、現在において子どもを「正直」「素直」「かわいい」等であると感じている者は、幼い頃、子どもと関わるのを「嬉しい」と感じていたり、現在において子どもと関わることに幸福感を感じている者は、幼い頃、子どもと関わることを「楽しい」と感じていたと考えられる。また、子どもを「かわいい」と感じる気持ちは、現在においても過去においても関連しているといえる。一方、否定的タイプ同士で有意な相関が認められる組をみると、現在、子どもと関わることについて「嫌い」「どうしたらよいかわからない」と感じている者は、幼い頃、子どもを「嫌い」だと感じていることがうかがえる。

表5 『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』と『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由：タイプ及びキーワードの相関分析（有意な相関がみられるもの）

『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由	『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由	
「良い－良い」	「良い－嬉しい」	r=.230, p=.003
「良い－褒め・賞賛」	「良い－褒め・賞賛」	r=.156, p=.045
「良い－嬉しい」	「近所」	r=.162, p=.037
「良い－幸福」	「良い－楽しい」	r=.196, p=.012
「悪い－悪い」	「悪い－嫌い」	r=.174, p=.025
「悪い－不満」	「世話・面倒」	r=.156, p=.046
「悪い－嫌い」	「悪い－嫌い」	r=.179, p=.021
「悪い－嫌い」	「年下」	r=.164, p=.035
「悪い－困っている」	「関わる・接する」	r=.390, p=.000
「その他－驚き」	「良い－良い」	r=.199, p=.011
「その他－驚き」	「年下」	r=.159, p=.041
「その他－驚き」	「世話・面倒」	r=.291, p=.000
「その他－驚き」	「なつく・慕う」	r=.222, p=.004
「言動・発想」	「世話・面倒」	r=.194, p=.013
「言動・発想」	「悪い－悲しみ全般」	r=.247, p=.001
「関わる・触れ合う・接する」	「良い－楽しい」	r=.177, p=.023
「一緒」	「世話・面倒」	r=.167, p=.032
「元気」	「世話・面倒」	r=.156, p=.046
「元気」	「近所」	r=.290, p=.000
「心」	「考える・意識する」	r=.190, p=.014
「成長」	「良い－楽しい」	r=.169, p=.030
「成長」	「良い－好き」	r=.262, p=.001
「成長」	「年下」	r=.169, p=.030
「成長」	「世話・面倒」	r=.301, p=.000
「成長」	「きょうだい・いとこ」	r=.185, p=.017
「成長」	「組織名」	r=.180, p=.020
「良い－好き」	「良い－褒め・賞賛」	r=-.160, p=.041

『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由		『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由
・末っ子だから、面倒をみてあげるのがうれしかった。	→	子どもは素直だから。
・小さい子と遊ぶのが好きだった。	→	子どもたちと接していると楽しいし、幸せな気分になれるから。
・年上の方が遊びやすかった。同学年は少し苦手だったから。	→	ふにふにしている。何を考えているかわからない。未知の生物。

次に、感性タイプとキーワード間で有意な相関が認められるものをみると、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由における肯定的タイプ「良い－嬉しい」は、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由におけるキーワード「近所」と関連している。また、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由における肯定的タイプ「良い－楽しい」は、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由におけるキーワード「関わる・触れ合う・接する」、「成長」、『私は子どもの頃、子どもが「好き

『嫌い／わからない』でした』の理由における肯定的タイプ「良い－好き」は、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由におけるキーワード「成長」と関連している。つまり、現在において子どもと関わることを「嬉しい」と感じる者は、幼い頃、「近所」のように身近な場で子どもと関わる経験を持っていると考えられる。また、幼い頃、子どもと関わることを「楽しい」「好き」と感じていた者は、現在、子どもを「好き／嫌い／わからない』であることの理由として、子どもと「関わる・触れ合う・接する」ことを挙げるとともに、子どもの「成長」を楽しんでいると考えられる。

『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない』でした』の理由		『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由
近所の年下の子や、低学年の子の面倒をよく見ていた。小さな子の世話をするのが好きだった。	→	・成長をみて変化していったときの喜びがある。
一緒にいて、すごく楽しかったし、一緒に遊んだりするのがすごく面白かったから。	→	・子どもと一緒にいると、すごく楽しいし、子どもたちと触れ合う時間はとても楽しくて、一緒にいるだけで笑顔になれるからです。
年下のいところが多くいて、その子たちと遊ぶのが好きだったから。世話を焼くのが好きだったから。	→	・子どもは素直で、良くも悪くも染まりやすいところが好きです。反応がいいところも好きです。成長が早く、いろんなことを吸収しやすいのも好きです。

否定的タイプとキーワードの関連では、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由における否定的タイプ「悪い－不満」は、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない』でした』の理由におけるキーワード「世話・面倒」と、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由における否定的タイプ「悪い－嫌い」は、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない』でした』の理由におけるキーワード「年下」と、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由における否定的タイプ「悪い－困っている」は、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない』でした』の理由におけるキーワード「関わる・接する」と関連している。また、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない』でした』の理由における否定的タイプ「悪い－悲しみ全般」は、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由におけるキーワード「言動・発想」と関連している。実際の記述内容を見ると、幼い頃に年下の子とも関わるのが面倒だと思ったり、関わる経験を持っていない場合には、現在においても子どもを好きになる自信が持てなかったり、子どもとの関わりに戸惑う様子がうかがえる。しかし、幼い頃に「世話・面倒」をみていた者でも、現在においてはそれを「面倒」と感じたり、幼い頃は小さな子どもと関わり方がわからなかった者でも、現在においては子どもの発想にワクワクする等の変化もみとれる。先にも述べたように、「好感」群・「嫌悪」群と「過去好感」群・「過去嫌悪」群について有意な相関が認められないことと併せて考えると、現在における子ども観は、過去の子どもの感情と関連するカテゴリーもみられるものの、成長過程において変化することが示される。

『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない』でした』の理由		『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由
・自分より年下の子たちと付き合うのは面倒だと思っていた。やんちゃな子があまり好きではなかった。	→	・嫌いではないけれど、将来クラスを持ったとき、全員を好きになれる自信がないから。
・年下と関わるのがあまりなかったので…。年上と関わることの方が楽しかったような気がする。	→	・好きになれる子となれない子がいるから。対処できる子ならいいけれど、出来ない時にとまどいそう。
・お世話をしてると、自分が大人になった気分になれた。	→	・かわいいし、一緒にいてすごく楽しいけど、たまにすごく面倒くさくなる。
・末っ子だから、お姉さんの方が好きだった。小さい子とはどう接していいかわからなかった。	→	・子どもは自分にない発想ができて、それをみるのはワクワクするし、とにかくみんなかわいいから。

キーワード間で有意な相関が認められる組では、『私は子どもが「好き／嫌い／わからない』です』の理由では、「元気」「成長」等が、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない』でした』の理由では「世話・面倒」等といったキーワードが多く挙げられる。実際の記述内容を見ると、幼い頃、子どもの「世話・面倒」をみていたこ

とを記述する者は、現在において子どもの「元気」さや子どもの「成長」を子どもを好きな理由として挙げている。このことから、幼い頃の子どもに対する「世話・面倒」の経験が、その後の肯定的な子ども観の形成に影響を及ぼすことが示唆される。

『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由		『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由
・小学生の頃、低学年の子の面倒をみるのが好きで、慕ってくれるのがうれしかったから。	→	・元気で無邪気なところがかわいいから。
・幼稚園に上がったときに、年少さんの子と遊んだり、お世話をするのが好きだった。あと、自分の弟が生まれた時も面倒をみて、本を読んだりしていた。	→	・子どもは本当に素直で、たくさんの可能性を持っている。特に幼稚園生くらいの子が成長するのを見守って手助けするのが嬉しいし、幸せ。

有意な負の相関がみられる1組については、「『私は子どもが「好き／嫌い／わからない」です』の理由における「良い－好き」が、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由における「良い－褒め・賞賛」と関連している。これは、現在において、子どもを「好き」だと感じている者は、幼い頃、子どもを「好き／嫌い／わからない」とする理由において、子どもを「かわいい」と記述していないことを示している。先にも述べたように、『私は子どもの頃、子どもが「好き／嫌い／わからない」でした』の理由においても、「良い－好き」と「良い－褒め・賞賛」は有意な負の相関が認められる。このことから、子どもを「かわいい」と思う感情は、過去においても成長して後も、「良い－好き」とは正比例しないことが明らかになる。一般に、「子ども」とは「かわいい」ものとされ、出産・育児経験の有無にかかわらず、子どもを「かわいい」存在として普遍化する傾向があることが指摘されている⁹⁾。本研究においても、多くの学生が子どもは「かわいい」と記述しており、肯定的タイプ「良い－褒め・賞賛」に含まれている。しかし、本報告において「良い－褒め・賞賛」は、肯定的タイプとの有意な負の相関がいくつか認められている。このことから、子どもを「かわいい」と表現することは、子どもを肯定的に捉える以外にも、何らかの意味を内包していることが示唆される。

4 おわりに

本報告では、自由記述による回答をテキストマイニングを用いてカテゴリー化し、それらに対する回答の有無を統計的に処理し、分析を行った。そのため、抽出されたカテゴリー間の関連性、つまり自由に記述された言葉が実際の文章の中でどのように関連しているか、十分に捉えるには至らなかった。今後は、抽出されたカテゴリー間の結びつきを捉えるとともに、カテゴリーを用いてモデルを生成し、学生の子ども観について詳細に分析する必要がある。また、「かわいい」等のキーワードについて、さらに丁寧な分析を行うことが今後の課題として挙げられる。

本研究は、平成22年度上越教育大学研究プロジェクト（若手研究）の助成を受けて行われたものである。ここに記して感謝申し上げる。

引用文献

- (1) 文部科学省（1998）中学校学習指導要領。
- (2) 大滝まり子，戸田まり，佐藤信雄（2003）幼児教育科学生の保育観，子ども観と自己認識（2），北海道文教大学短期大学部研究紀要，（27），77-85。
- (3) 島田俊朗，諏訪英宏，榎内光子（1999）保育科学生の子ども観及びライフスタイルの変化に関する調査研究，徳島文理大学研究紀要，（58），177-186。
- (4) 細野恵子，市川正人，上野美代子（2009）看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージ，名寄市立大学紀要，3，79-86。
- (5) 矢田昭子，笠柄みどり，吉田由美（2007）保育所実習が看護学生の子ども観に及ぼす影響，鳥根大学医学部紀要，30，35-42。
- (6) 星野修一，日瀧淳子，吉田圭吾（2008）大学生における子ども観に関する一考察，神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要，2(1)，33-42。

- (7) 嘉数朝子, 島袋恒男, 當山りえ, 喜友名静子, 友利久子, 廣瀬真喜子 (1997) 大学生の「子ども観」に関する研究—保育職志望度との関連で—, 琉球大学教育学部紀要, 51, 207-213.
- (8) SPSS (2010) Text Analytics for Surveys Training course.
- (9) 荒川志津代 (2005) 子どものかわいさに関する子ども観の比較—1980年と2005年の場合—, 日本家政学会誌, 56(10), 729-736.

The view on children by the students of teacher training university.

Chinatsu YOSHIZAWA* • Midori OTAKI**

ABSTRACT

The purpose of this study is to clarify the view on children by the students of teacher training university. The text mining is used as a studying method. As a result of this study, the following was clarified.

- (1) Many students were answered “I like children”. “I like children” group answered about the child, “Honesty”, “Obedience”, and “Lovely”. “I dislike children” group answered about the child, “Trouble” and “I don't know how to be related”.
- (2) Student's feelings of “I like children” or “I dislike children” not continue from early ages.
- (3) It was suggested that spending time with the child, and understanding enough about the child are necessary for the students to feel the child to be affirmative.

* Natural and Living Science

**Tokyo Kasei University